

『5月の和牛の飼育管理』 水田づくりと飼養管理

和牛試験場 舟木 彬 介

陽春たけなわとなり水田に蛙の声をきくようになって、農家は田ごしらえに忙しくなると、冬の間のんびり待機していた和牛もいよいよ活動の時がやって来ました。年間通じて11月と5、6月が一番多く牛を使役しますが、今まで牛舎の内に飼われた牛を急に使役しますと疲労が激しかったり、足をいためたり色々な故障がでできます。このことをできるだけ少なくするためには使役する前から次第に体力を増進し、使役し易い状態にしておかなければなりません。

また5月は1年中で一番水分の多い醗酵しやすい青草を給与する時期ですから、うっかりするととりかえしがつかない事があります。そこで農耕使役に供する準備と乾燥性の飼料から青草に切りかえる注意について述べてみたいと思います。

「使役と管理」

最近和牛の見方も次第に変わって来ましたが、まだまだ農家にとって和牛は重要な機動力ですから、和牛を能率よくできるだけ消耗を少なくして使役することが大切です。

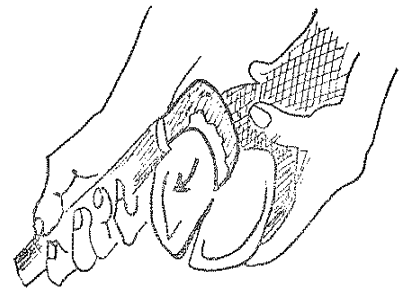
(1) 使役に先立ってつめを切っておきましょう。

つめがのびていると作業能率が悪くなり、けん引力も小さく疲労しやすく、足やつめをいためたりしますから、田ごしらえする前につめを切っておきたいものです。

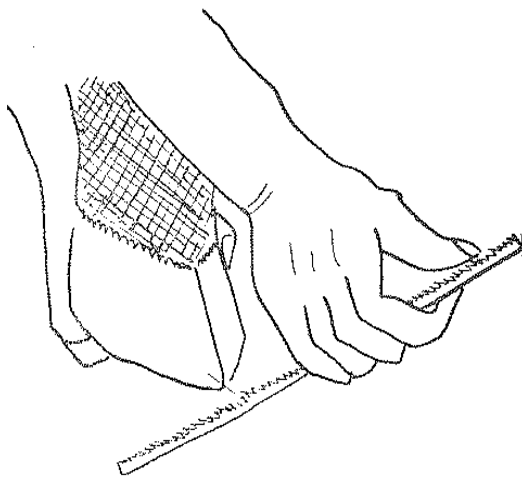
削蹄するには削蹄鎌、削蹄刀又はせんかん、ヤスリ、などがあれば結構ですが鎌だけでもできます。削る場合は薄く何回も切るようにし、蹄踵(かかとの方)から蹄先へ向って削るようにします。

どの部分をその程度削るかは蹄の形や、肢勢によって差がありますが、色々な形のつめの削蹄方法を図にしますと次のようになります。

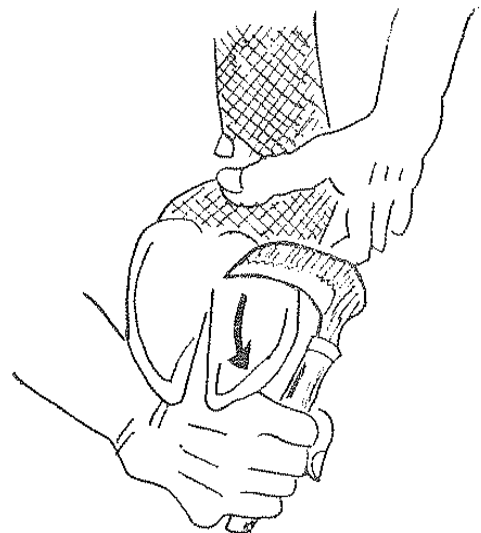
鎌の持ち方 (1)



やすりの持ち方

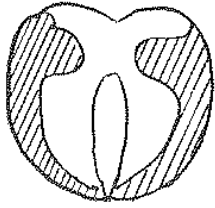


(2) 鎌の持ち方



各種蹄の削蹄部位

(8) 狭窄蹄



蹄壁が蹄底に巻きこまれているもので、巻きこまれている部分を削りとり、蹄底を平にして土抜きを作らず、接地面を多くする。

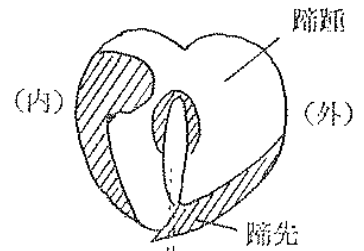
(3) 立蹄



少なく削ずる

蹄踵部を多くけずるつもりで矯正する。

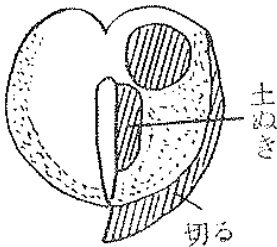
(1) 正常蹄



切りとる

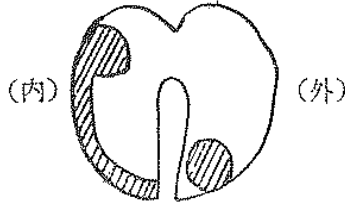
大体平均に削るが、一般に牛のつめは内蹄と蹄先がよくのびるから斜線の部分を多く削る。正常蹄の地面と蹄とのなす角度は前蹄45度、後蹄50度が理想的です。

(7) 親子蹄



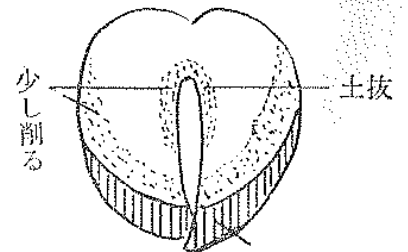
大きい方のつめの蹄踵部と蹄先部と主に削り大体子蹄に合わせるようにし土抜きを作り子蹄はほとんど削らず土抜きも作らない。

(4) かにずめ



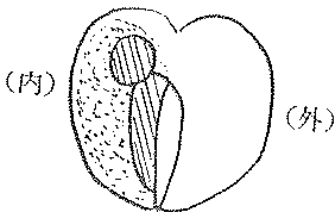
かにの鉗のようになっているつめで、内蹄踵と外蹄先を多く削るつもりで矯正する。削りすぎると関節炎を起したりするので少しずつ数回にわたって行なうようにする。

(2) のびすぎた蹄



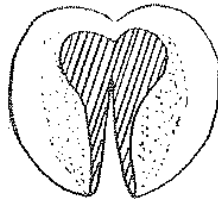
伸びすぎた蹄先を切り土抜きを作る。蹄壁や蹄底がらうすいので少しずつ削り、長期間にわたって矯正する。

(6) 内蹄高く外蹄々先の低い蹄



内蹄を削って外蹄と同じ高さにし内蹄に土抜きを作る。

(5) 開き蹄



蹄踵内側の隆起部を削り落し土ぬきを充分に作る。

(2) 使役前に使役調教をしておきましょう。

はじめて農耕に使う若牛は使役調教をしておかなければなりません。まず前進、停止、左、右廻り後退を教えます。鞍を充分に牛に見せ、右側から背に装着して馴らします。次に鞍つけができたなら牛を田畑に入れすきのかわりに引木をつけて、はじめは調教者がもって歩かせ次いで木を引きずらせませす。この際、適ぎ前進、停止、左、右廻りをさせませす。馴れて来たらすきをつけて最初浮かせて次第に深耕して行くようにします。最初

のうちは別の人が鼻をもって誘導するのもよい効果があります。

(3) 使役期前に栄養をよくし体力を増進しておきましょう

牛が栄養のよいときと、やせているときでは作業能率に相当の違いがあり、やせていると牛も疲労しやすくなりますから使役する前半月ぐらいから増飼いをして、使役に耐える体力をつくっておくことが大切です。また、暗い牛舎から急に出して使役すると日光が

岡山畜産便り 1961.05

強いときなど日射病で倒れる事がありますから、前から毎日1時間位は日光浴をして（午前10時頃が最適です）慣らしておきましょう。

（4）使役期に入ってから の注意

いよいよ使役するときは、連日の仕事で牛の体力の消耗が激しくなりますから増飼いをして体力の補給をしなければなりません。増飼いは日ごろ粗飼料で飼われているものは濃厚飼料を少し加えるとか、ふだん濃厚飼料を与えているものは1～1・5キロぐらい濃厚飼料の増飼いをします。また平ぜいを与えている粗飼料を良質の粗飼料（とくに良質の乾草）におきかえることも効果があります。

牛は軽い仕事なら慣れると作業中でもねりがみしますが、田ごしらえなどの重労働では作業中にはねりがみをしません。したがって飼いつけ直後使役すると次の飼いつけまでねりがみをする暇がないこととなります。ねりがみがないと青草を多く与えた後など、胃の中で醗酵して鼓脹の原因になりますから、よく注意して朝飼いを早めに与えて1～1時間半ぐらい休ませて使役を始めるようにします。もし飼いつけ後直ちに使役する必要があるときは、仕事を始めて2～3時間たったら腹帯などをゆるめて休憩してねりがみをさせなければなりません。

また水田使役のとき、牛の腹に直接泥水があたって腹が冷えると鼓脹や下痢、疝通の原因になりますから、印度袋などで腹部を覆ってやると効果があります。

使役すると体表や呼気の中から水分が多く発散し、へいぜいよりも水を多く必要としますから食後充分に水を飲ませ、仕事の中休みにも小川で水を飲ませるようにします。食塩を給与すると疲れが少ないので、朝飼いの飼料に余分に50グラムぐらいの食塩を混ぜて与えるようにします。

仕事が終わったら牛を川入れします。川入れは腹をつけないようにひざの下までくらい水をつけて、熱をもった四肢をよく冷してあんましてやり、鞍があたって汗ばんだ部分をワラ束でよく摩擦し乾かしてやります。もし鞍傷しているときは、軟膏をつけてやり翌日は綿などを置いて鞍をつけるようにします。

「乾燥飼料から青草にかえるときの注意」

5月は柔かく水分の多い醗酵し易い青草を与える時です。今までワラや乾草を与えていた牛に急に青草にかえると胃腸障害を起します。レンゲやクローバーの生草類を一度にたくさん与えたり、また刈取った草を積み重ねて醗酵したものを与えますと下痢や鼓脹を起しやすくなります。この牛のひどい下痢は発育を悪くすることがありますから充分注意しなければなりません。従って青草へのきりかえは、ワラや乾草の中に青草を混ぜて与えるようにし、次第に青草の量を多くするようにします。クローバーやレンゲ、畦草などの水

分の多いものは半日から1日位乾燥させてから与えると非常に効果的です、とくにレンゲは蛋白に富んだ青草ですから、余分は乾草やエンシレージとして貯蔵しておきましょう。また使役中の成牛に青草を与える場合はできるだけ朝と昼飼いには乾燥性のものを与え、青草は夕飼いに与えるようにします。